

橋本治

天使のウイंक



橋本治

天使のウイंक

てんし
天使のウインク

2000年 3月25日 初版印刷

2000年 4月 7日 初版発行

著者 はし もと おきむ
橋本 治

発行者 中村 仁

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3664

振替 00120-5-104508

印刷・製本 大日本印刷

Printed in Japan ©2000 CHUOKORON-SHINSHA, Inc.

Osamu Hashimoto

ISBN4-12-003000-8 C0095

●定価はカバーに表示してあります。

●落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

目 次

まだ「こわいもの」はあるだろうか	7
神戸児童連続殺傷事件で思うこと	19
それをするのは子供だけだ	28
プリンセス・ダイアナとセックスレス夫婦	37
父の後ろ姿	46
お父さんは強壮剤人間	56
なぜ権力の発想しかできないか	66
親は何人必要か？	76
「子供」という伴走者	86
大蔵省やら中学生で何をガタガタ	96
「サラリーマン」はなぜ差別語にならないのか	111
すべての母親は暴君かもしれないけど	121
かくして地域社会は絶滅する	131
地域社会は下半身である	141
サッカー社会と野球社会	151

セックスレス・セックスフル 161

貧乏神の祀りかた 172

それを「病氣」と言っちゃうのか…… 182

貧すれば窮す 192

HALはどこへ行った 202

男女雇用機会均等法と風紀に関する一考察 212

『だんご3兄弟』はご存じですね？ 222

女帝の追放 232

講演を考える 242

二十歳過ぎたらどんな人？ 252

名もない世代 262

恋患いの効用 272

それが「自由」というものだったか 282

努力はせつない 292

装画 田中靖夫
題字 片岡 朗

天使のウイंक

まだ「こわいもの」はあるのだろうか

一九九六年の一月『セブン』という映画が日本で公開されて、その宣伝文句は「注意！ 本当に怖い」だった。それを見て私は首をひねった。「今時この種の映画で『本当に怖い』ということがあるのだろうか？」と。

聖書の「七つの大罪」をなぞった猟奇的な連続殺人事件が起こり、これにブラッド・ピットとモーガン・フリーマンの老若二人の刑事が挑む。暗い雨の降るニューヨークの冬に、異常な犯人が跳梁する。『セブン』という映画は、いたって暗いシーンの連続なのだが、撮影にダリウス・コンジを起用した監督のデヴィッド・フィンチャーは、その陰惨を「暗く美しいもの」として捉えていた。『セブン』は耽美的な映画でもあって、『怖さ』があるのならそこだろう。連続殺人事件という暗く陰惨なものに対して、美しく撮るだけの冷静な距離を置く。「怖い」のなら、その心理背景が「怖い」のだが、しかしそれだけで「注意！ 本当に怖い」というような映画にはならない。今までにやったことのない物語上のトリックでもなければ、『怖い映画』は出来あがない。そのことをよく承知していればこそ、この映画の公開を担当した日本の宣伝部も、「この

映画には新しい「恐怖のトリック」がありますよ」という点を強調して、「本当に怖い」と謳ったのだろう。しかし、そんなトリックが本当にありうるのだろうか？——これが『セブン』を見る前の疑問だった。

この種の映画のこわさの第一は、「犯人は誰か？ 犯人はどんな人間か？」というところにある。「まともだと思われていた人間の中に、実はとんでもなく異常な素顔が隠されていた」——これが、この種の映画を成り立たせるこわさである。その典型は、アンソニー・パーキンスが主演したヒッチコックの『サイコ』だった。一九六〇年に公開された『サイコ』はこの種の映画の代表で、だからこそ登場と同時に、『サイコ』はこの種の映画に終止符を打ってしまった。人間は学習をするものだから、初めてそういうものに出くわしたのなら驚くけれども、同じ手口が二度三度とは続かない。『サイコ』的なヒットを成り立たせるためには、「異常な素顔を隠した普通人」を演じる有名スターがいる。「有名スターの演じる役だから安全だ。有名スターが悪い人であるはずはない」という思い込みが、それを可能にする。一九六〇年にあったこの古い思い込みは、今でもまだ生きているだろう。

アンソニー・パーキンスが異常者を演じて、それがセンセーションを得てしまった後では、誰がやっても二番煎じになる。だからこの種の恐怖映画は、『サイコ』に始まって『サイコ』に終わる。現に『セブン』には、刑事役の二人以外に有名スターが出ない。異常なことをする人間へのスポットは、もう『サイコ』で当てられ尽くしてしまったのだ。「異常なことをする人間への

恐怖」が学習されてしまった以上、「そういう人間がいるのはこわい」ということが、ドラマの上では成り立たない。一度目は「告発」だが、二度目からは「肯定」になる。それをする意味は、「猟奇趣味」以外にない。そんなものが、「本当に怖い」であるはずはない。だからこそ、恐怖の中心は別の方向に移る。「そういう人間は、あなたのそばにいるかもしれない。そういう人間は、どこにいるのか分からないのだから」という方向である。「恐怖の犯人」役には、まだ有名ではない、印象の薄い無名の役者がふさわしいことになる。これが『サイコ』以後の常識である。

犯人はどこにいるか分からないし、どんなやつかも分からない。しかし、事件を追う側は、その犯人にきりきり舞いを演じさせられる。無名の役者が演ずる「見えない犯人」も、どこかで姿を現さなければならぬし、どこかでクローズ・アップされなければならない。そうやって、今度は新しい問題が発生する。「無名の役者が一人で陰惨なことをし続けるシーン」に、観客がどこまでつきあえるか? という問題である。あるいは、「犯人役の無名の役者に、それに応えるだけの演技力があるか?」ということである。犯人は無名で、その無名の犯人によって追う側がきりきり舞いさせられる——しかしやがてその犯人は追い詰められ、徐々に犯人の姿が見えてくる。見えてきた犯人は、見慣れるに従って、「なーんだこんなやつか……」と思われるような卑小さを持っている。そうでなければ、映画はめでたく終わらない。卑小になって消えてしまうような人間だからこそ、犯人役には無名の役者が必要になる。

つまらないものの正体を見てしまった観客は、同じ体験を二度繰り返そうとは思わない。刺激

だけを求めて「猟奇殺人の映画」を見に行く観客だっているだろう。しかし「猟奇殺人の映画」は、根が単調なものだ。そうそうは「おもしろい映画」にならないし、「すぐれた映画」にもならない。「そこに客の需要がある」と思えば、本来だったら成り立たない二級品も、堂々たる一級品の顔をして登場するかもしれないが、しかし、「くだらない刺激」に満ち満ちただけの作品が、そう簡単に「本当に怖い」というところへは辿り着けない。だからこそ私は、「もう『怖い』と人に思わせることのパターンをやりつくして、どうして『本当に怖い』などということが成り立つのだろうか？」と、『セブン』のキャッチコピーの前で首をひねった。

「もう『怖いもの』は作れない」——私がそう思ったのは、『セブン』の前に『羊たちの沈黙』という映画があったからだ。

トマス・ハリスのベストセラー小説を映画化したこの作品は、一九九二年度のアカデミー最優秀作品・監督・主演女優・主演男優・脚色賞を受賞した。「なんでこんな暗い映画がアカデミー賞を取るんだ？」と私は思ったけれども、この映画が「客を呼んだすぐれておもしろい映画」であつたことも事実だろう。『羊たちの沈黙』は、連続殺人事件にまつわる「事実」を、最も克明に描いた作品である。だから私は、「こんな暗い映画」と思う以前に、「こんないやな映画」と思うけれども。

「女性を誘拐し、皮を剥いで殺害する連続殺人犯『バッファロー・ビル』の捜査に行き詰まった

FBI行動科学課課長クロフォードは、FBIアカデミーの訓練生のクラリスにある任務を与える。それは9人の患者を絞殺して食べた獄中の天才精神科医レクター博士に協力を求め、心理的な面から「バッファロー・ビル」に迫ることだった——（ビデオのパッケージから）。

この映画には「非常にいやなもの」がリアルに登場する。生々しい遺体の写った殺人事件の現場写真とか、レクター博士が監禁されている精神病棟の地下室とか、混濁した犯人の精神状況もありありと伝えるその住居の様子とか、なにもここまで気持ち悪いものをエンエンと映さなくてもいいものかと思いたくなるような描写に満ち満ちている。「連続殺人事件」というものを発生させる人間達の心理風景をここまできちんと絵にしてみた映画はこれ以前にないだろうし、この後にもないだろう——やっても仕方がない。だから私は、「もう「怖いもの」は作りようがない」と思う。

一方には、女の生皮を剥いで殺す連続殺人犯がいる。異常者は野放しになっていて、この捜査は行き詰まっている。その解決に登場するのが、精神病院の地下に監禁されている、自分も連続殺人犯であり「人食いハニバル」と呼ばれる天才精神医学者だという。よくもこれだけロクでもない設定を並べたなと思えるようなもので、この映画は、「ある種の人間達」の「なにか」を刺激するような、「危険な映画」でもあると思う。しかし、そういう表面的な「刺激」とは別に、この映画にはもう一つの面もある。「しっかりと骨格」である。

『羊たちの沈黙』は、意外なことに、「成長^{ビルトウングス}」の映画である。FBIの訓練生クラリスは、こ

の事件を解決するプロセスの中で、自分の中にあつた正体不明の恐怖感を克服し、「恐怖に脅える者を助け出してやりたい」と思つていた自分の「使命」に目覺めて行く。この若い女性主人公は、「冷静に事態を見極めて行けば、『怖い』と思うようなものはなくなるといふことを一つ一つ学習して行く。その彼女を成長へと導くのが、凶暴なる殺人鬼でもある天才精神医学者レクター博士だといふところが、いたつて風変わりなこの映画の見所ではあるが。

異常なるレクター博士は、実は一風変わった「安楽椅子探偵」である。現場に一度も足を運ばず、頭脳だけで難事件を解いて行く——推理小説の世界ではお馴染みのキャラクターである。

この監禁されたレクター博士をホームズ役とすれば、女主人公のクラリスはワトソン役なのだが、この異常なるホームズは意地悪で、ワトソンに肝心なことを教えてくれない。「教えてもいいが、その代わりに」といふ取引を、ワトソンに持ちかける。女主人公は、その信用していいのかどうか分からない相手と向かい合うことによつても、成長して行く。

クラリスが上司からレクター博士との面会を命じられたのは、バツファロー・ビルの事件が暗礁に乗り上げて、「異常者の心理をもう一度点検しなければならぬ」という必要に迫られたことによる。だから、「異常者の心理は異常者にしか分からない。異常者中の異常者であるレクター博士に面接して、異常心理に関するアンケートを取つてこい」といふことになるのだが、しかしそういう訪問を受けたレクター博士は、その件に関して否定も肯定もしない。果たして、「異常者の心理は異常者にしか分からない」なのか？ 実のところ、『羊たちの沈黙』という不思議

な映画の謎を解く鍵はここにある。

「異常者の心理を探るサンプリングをしてこい」と命じられた主人公は、当然そのつもりで面接に行く。しかし、世間の俗物を嫌う意地悪なレクター博士の答えたことは、「異常者特有の心理」なんかではなかった。レクター博士は精神科医でもあって、彼はバツファロー・ビルによる未解決の連続殺人事件にかねてから興味を持っていた——彼は「異常者」としてこの事件に関わってくるのではなくて、「その犯人はかつての自分の患者の一人である可能性が高い」ということを前提にして、それを隠しながら、女主人公に接近する。「異常者の心理は異常者しか知らない」なら、その心理は「未知なる恐怖」にもなるが、ここにあるものは、「既に精神科医が把握している既知のもの」なのである。

ここには明らかにギャップがある。異常者を追う側は、「まだ我々には知らない異常者特有のなにかがある」と思い込んでいる。しかし、異常者の側にも立つ精神科医は、「そんなことはない」という前提に立っている。彼がクラリスに教えることは、「医師として知り得た患者に関する既知の情報」と、「あなた達は『異常』に目がくらんで、もっとシンブルな、捜査に関する根本原則を忘れている」という「示唆」だけなのだ。

レクター博士がクラリスに言うことは、「本質は単純だ^{シンブル}」だけであって、それ以外のことは言わない。「彼は異常者中の異常者だから知っている」のではなく、彼はただ「冷静だから知っている」なのだ。女主人公クラリスは、そのレクター博士の言葉に従い、独自の判断によって犯人

の割り出しに成功する。つまり、この異常なディテールに満ち満ちている映画が告げるのはたった一つ、「異常というディテールに騙されるな」だけなのである。であればこそ、この映画における「非常にいやなものオンパレード」である。

この映画は不思議な構造を持っている。バッファロー・ビルという異常な連続殺人犯を追うはずの映画が、それをそっちのけにして、「レクター博士という一筋縄ではいかない人間によって成長して行くクラリスの物語」を主流にする。「本質は単純だ。異常というディテールに騙されず、不気味という見せかけにごまかされるな」を原則にしようとするクラリスの周りには、不気味な人間ばかりが登場する。「異常」ではないはずの現実社会の住人Ⅱ男達が、自分の任務を全うしようとするクラリスを、彼女が「若い女」であるという理由だけで、いやらしい表情をちらつかせて見る。不気味というのなら、それこそが不気味である。

混沌とした現実社会の中で生きて行かなければならない人間にとって最も重要なことは、その混沌に押し流されず騙されない自分自身を作り上げること——これだけなのである。ここにはもう「異常者」という特別がない。それを特別視している限り、見るべきものが見えなくなるからだ。

『羊たちの沈黙』を書いた原作者トマス・ハリスは、FBIの行動科学課の主任だったロバート・K・レスラーに取材をした。この人物は『FBI心理分析官』という本まで書いた。『羊たちの沈黙』と『FBI心理分析官』の両方を読むと、あっけにとられてしまう。「連続殺人事件